

The Roman of Kitakata



み

ちのくの蔵のまち」としてその名を知られ、心の憩いを求める旅人たちが集う喜多方。表通りはいうまでもなく、路地裏にも建ち並ぶ蔵屋敷は、各地から訪れる多くの人々の目をみはらせる。

市内にある蔵の数は、おおよそ二千六百棟以上といわれる。人口三万七千のまちに、このような多くの蔵が造られたきっかけのひとつは、明治十三年に起きた大火だった。現在の喜多方市の中心部(當時は小荒井村)の表通りにある一軒の店から出た火は、瞬く間に燃えひろがり、約三百棟が灰燼と帰した。失意に沈む村人たちの目に映ったのは、一面の焼け野原の中にくすぶりがらも残った蔵の姿であった。そのためか、普通は倉庫として用いられる蔵が、

喜多方では住居(蔵座敷)、店舗(店蔵)、工場、醸造場、寺院など、その形態は、人々の暮らしと深く結びついている。

以前は、四十代までに蔵を建てられないのは恥とまで言われたように、喜多方の男たちにとって、蔵は夢と誇りの対象であった。一つの蔵を完成させるのに十年間の歳月を費やしたのもあり、自然とその技法も向上し、趣向の凝りようも競い合われた。

喜多方の蔵座敷として代表的な存在である上町・甲斐本家は、櫓をはじめ紫檀・黒檀などの銘木をふんだんに使い、外壁も鳥城と称されるように、白漆喰に比べてはるかに工費のかかる黒漆喰で仕上げ、大正六年から七年間の歳月をかけ、現在の金額にして五億円以上という膨大な費用を投

じて建てられた。喜多方の蔵の大きな特徴は、その種類と用途の多様さにある。最もポピュラーな白壁土蔵、豪華な蔵座敷、ひなびた味の粗壁、砂壁。国道一三二号線を北へ向かえば、緑あふれる三津谷地区に、レンガ壁の蔵が並ぶ。さらに進むと、杉山地区には豪壮な農家蔵が美しさを競う。そのひとつひとつが人々の生活の場であり、それぞれの趣を見せている。

近年、喜多方には、蔵を訪ねてやってくる観光客の姿も多い。雪深い山あいのまちで、静かに暮らしを営んできた喜多方のまちびとたちは、各地から訪れる旅人たちを心暖かく迎え入れてきた。しかし、喜多方の蔵は、決して観光が目的で建てられたものではなく、今も喜多方の人々の暮らしを支える大切な生活の場となっている。蔵の所有者有志により「蔵の会」が発足。今後、蔵の保存と活用が継承し、蔵の伝統文化を守り続けようとする気運が高まっている。

